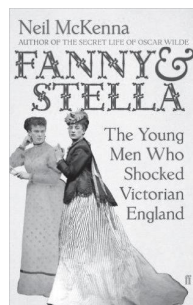


書 評

Neil McKenna, *Fanny and Stella: The Young Men who Shocked Victorian England*
(London: Faber & Faber, 2013)



宮崎 かすみ

本書は、ワイルド評伝に新境地を開いた衝撃作、*The Secret Life of Oscar Wilde* (2003) の著者、ニール・マッケンナの第二作である。ワイルド評伝中でも重要な言及のあったステラ・ファニー事件を、前作同様の小説仕立てで大枚 360 ページにまとめあげた。マッケンナは本書でも、確固たる資料に基づきながら、想像力を駆使して情景や登場人物の心情の詳細、あるいは法廷シーンを大胆に創り上げてゆく独特のスタイルを採用している。巻末には注があり資料の出典が記されているにもかかわらず、本文には注番号を施さないといった特徴も踏襲された上に、独自の文体は前作よりさらに徹底され、もはや小説の趣がある。史実に基づいたノンフィクションを、フィクションのように洗練された文体でヴィクトリア朝のクィアな世界を再創造したことが本書の最大の価値である。

ところで、ワイルド伝で好評を博したマッケンナが、次に満を持して出したのが、なぜステラ・ファニー事件なのか。ワイルド裁判からステラ・ファニー事件へ、というマッケンナの関心の推移は、じつは近年のイギリス同性愛史研究における動向をそのまま反映している。簡単にその背景を整理すると、2000 年頃までイギリスの同性愛史といえば、もっぱらワイルド裁判の研究が主流であった。というのも、それらの多くがフーコーとウィークスが描いた近代同性愛成立のモデルに依拠していたからである。フーコーは、同性愛者なるものが、十九世紀後半、医学と法律の言説によって構築された上で、皮肉にも、そうした言説の「反動」(reverse discourse) として彼ら自身が自らの主体性の核に同性愛者という蔑称的な

アイデンティティを取り込んだという見取り図を示した。さらにジェフリー・ウィークスは、これをイギリスに適用し、ワイルド裁判において生産された反動言説こそが、同性愛アイデンティティの形成を刺激したとした。このモデルに依拠する限り、ワイルド裁判は近代同性愛概念が成立した歴史的瞬間として大きな意義を担うものであった。

ところが2003年に刊行されたH.G.Cocksの*Nameless Offences*がこの事態を一変させた。彼はフーコー・モデルに反旗を翻して、「言葉にできない」とされるソドミーの、否認と名付けという屈折した表象の側面から光を当て、フーコーが言うよりはるかに以前から19世紀前半同性愛者の自己形成と主体性があったことを詳細な資料に基づいて実証的に炙り出したのである。これを機に、ワイルド裁判一辺倒だった研究の流れが変わり、むしろもっと前の時代の、あまりに強烈なワイルドの影に隠れてこれまで見えなかった同性愛者たちの存在に光が当てられるようになっていった。コックスが、ワイルド裁判偏重の趨勢に異を唱え、ステラとファニーというクエアな女性装束者たちに光を当てた二年後、この女性装の若者たちに魅せられたMorris B. Kaplanも*Sodom on the Thames* (2005)を上梓した。この本で詳細に紹介されたこともあり、服装倒錯と男色の関係、および階級問題にも新たな視点を投げかけたステラ・ファニー事件が俄然注目を浴びるようになったのである。以下、ステラ・ファニー事件の経緯を紹介しながら、この事件のなかでもマッケンナの筆の冴えが光る箇所を指摘する形で本稿を進めてゆくことにしたい。

この事件は、Ernest Boulton(女性名 Stella)とFrederick Park(女性名 Fanny)という女装した若者二人が、1870年4月にストランド劇場から出てきたところを逮捕されたことに端を発する。以下に事件の概要をまとめるが、本書の記述はたいへん主観的かつ印象的で時系列も踏まえておらず、本書のみで事件の概要をまとめることはできないため、概略を述べるにあたって*Sodom on the Thames*の記述に頼ることを断っておく。当初の罪状は、二人が若者のグループを従え、女装してロンドンのウェスト・エンドを練り歩いて公序良俗を乱したというものだった。二人はそれぞれ、株式仲買人と裁判官を父にもつ中流階級出身の若者だった。拘留された二

人の審理が、ボウ・ストリートの治安判事裁判所で行われるや、大勢の野次馬や報道陣が詰めかけ、この事件の報道が連日、新聞・雑誌の紙面を賑わせた。治安判事裁判での罪状は、「おぞましきバガリーを互いに犯した罪」の他、「共謀して他の者らにその罪を犯すよう教唆した」ことなども加えられた。つまり重罪のソドミーである。さらに、警察によって家宅搜索された彼らの住まいから大量の婦人服、宝飾品、写真、手紙類が押収された。この審理で、ファニーとステラが女装して劇場やレストランに出かけているところ、あるいはバーリントン・アーケードを飾りたてた女性装束で練り歩いていたところを、管理人(ビードル)に追い立てられていたことなどが証言から明らかになった。この二人は常に女装していたわけではなく、男性の服装に身を包むときもあったが、そうした姿を見ても、彼らの崇拜者たちは女性が男装をしていると思いついていた。とりわけステラの女性らしさは生来のものにしか見えなく、女性として完璧な美貌と美声を誇っていた。治安裁判所での審理は約一か月間続いたが、結局、ウェストミンスター女王座裁判所での裁判まで判決は一年間持ち越されることになり、彼らは7月に保釈された。

この事件に関する暴露でもっとも衝撃的だったのは、ステラがニューカッスル公爵の三男で保守党の国会議員でもある Lord Arthur Clinton の妻を名乗り、夫婦同然の暮らしをしていたことだった。ステラは「Lady Arthur Clinton」と印刷された名刺をもち、メイドは、二人が一つのベッドで寝ていたことまで証言した。しかし二人の関係には諍いも絶えず、性格のきついステラに嫌気をさしたクリントン^{男爵}ステラと姉妹的關係にあったファニーに慰めを求め関係をもったりもした。クリントン^{男爵}逮捕状が発行されたのはステラとファニーの逮捕から5週間もたっていたが(意図的に遅らせたことが疑われる)、この時点で既にクリントン^{男爵}この世の人ではなかった。少なくともそういうことにされた。本書ではこの経緯が詳しく^記述されており、クリントン^{男爵}生死をめぐる謎に肉薄している。クリントン^{男爵}めぐっては国外逃亡説から自殺説まで様々な憶測が多くの雑誌で報道されたが、猩紅熱で亡くなったと『ランセット』誌が報道した。葬式も執り行われたが、彼の生死に関する疑念はくすぶりを続けた。結局、その後の彼の目撃証言はないものの、甥にあたる第7代ニューカッ

スル公の遺言(1927 年)には、生きていることを仄めかず言及があった。翌 1871 年 5 月に女王座裁判所での審理が開始された。首席裁判官が審判にあたり、訴追側には司法長官が登場、その上特別陪審団が編制されるという最上級の布陣で臨まれた。この裁判ではソドミーの法医学的所見が争点となった。本書は法廷における具体的なやりとりを初めて詳らかに再現した。以下では、この部分を中心に少し詳しく紹介したい。逮捕直後に行われた医療検査は警察医の Dr. Paul によって行われた。治安判事裁判で彼は「これほど弛緩した肛門を見たことがない」と証言し、ステラとファニーが肛門性交をしていたに違いないという所見を披露した。じつはこの警察医がこの時命じられた職務は、彼らの性別を確認することだけであり、肛門性交をしているかどうかまでの診断は、ポール医師の個人的な裁量から行われたことだった。ポール医師は、二人の医療検査を依頼された高名な法医学の専門医の一人、Dr. Taylor が講じた女装者やソドマイトについての講義を受けて以来このテーマに強い関心をもっており、当時の最高権威、フランス人 Tardieu の専門書も入手していたほどであった。この時はファニーの肛門の梅毒を治療したことのある Dr. Barnwell もポール医師の判断を支持した。

ニューゲイト監獄に移送されていたステラとファニーは、6 月にソドミーの身体的証拠をめぐる屈辱的な医療検査を受けさせられた。二人が常習的にソドミーを行っていたという具体的証拠を得たい検察側と、その反対を証明したい弁護側の戦いが彼らの肛門を舞台に繰り広げられたのである。著名な 6 名の法医学の専門医が二人の肛門やペニスを仔細に診察した。法医学の古典的教科書の著者である Alfred Taylor、性病の権威である Henry Johnson など顔ぶれは錚々たるものだったが、ソドミーの所見や症状を実際に診察したことがあるのはこのうち三名のみで、しかもそれとて 40 年前に一度のみであるとか、かなりお粗末な経験にすぎなかった。ここにはイギリスの医学がソドミーを扱う際の典型的な態度が現れている。イギリスにはフランスなどと違い、ソドミーのようなおぞましい悪徳は存在しないと公式にはされていた。専門医の経験が少ないのもそのためなのだ、と。それゆえソドミーの症例のエキスパートがイギリスにいないのはやむを得ない事情なのである。これは『ランセット』誌の論調であ

り、またイギリスの医学界を覆う公式見解であった。この報道を真に受けて、ウィークスは 85 年の刑法改正前にはイギリスに同性愛という概念が伝わっていなかったと主張した。しかしこの事件やコックスの研究が示すように、本当になかったわけではない。ソドミーに対する忌避感がこのほか強かったために、存在していないことにして黙認するという「否認と名付け」の独特の様式が社会に根付いていたイギリスに特有の事情なのである。従来踏み込まれることのなかった微妙な事情に切り込んだこの辺りの叙述は、マッケンナの筆が冴えるところである。

この医療検査の結果は、6 名の専門医のうち 5 名が、ステラとファニーの肛門周囲の所見からソドミーに耽っていた可能性を否定した。バーンウェル医師のみがファニーの診療経験から、ファニーが罹患していた肛門の梅毒がソドミーの結果である可能性を証言した。検察側の司法長官の頼みの綱は医学的所見であったから、数の上で劣勢であっても十分逆転のチャンスがあるとみて、二人の医師を証言台に立たせた。自分の患者を裏切るような証言を強いられたことに憤っていたバーンウェル医師は、いささか興奮しており証言の説得力が弱くなってしまった。他方、逮捕翌朝に診察したポール医師の証言こそ最有力と目されていたのだが、意外にもこれが覆された経緯をマッケンナは小説的手法で鮮やかに再現する。弁護士は見事な論理展開でもって、医師がポケットに忍ばせていたタルデューの専門書をきっかけに、彼が二人の逮捕に備えていたのではないかと、張り込みの警部とも通じていたのではないかと疑念を引き出した。しかも弁護士は、医師がこの時行った診察の正統性を問題にし始めた。先に触れたように、ポール医師のソドミーに関する診察は職務命令を超えていた。正式な命令に基づかない、恣意的な診療行為であることを医師も認めざるを得なくなり、裁判官は評決前の総括で、ポール医師の診断には正統性が無いとして、ソドミーの医学的根拠を却下した。評決の対象となったのは、女装をして公序良俗を乱したという点のみとなったが、陪審団は一時間にも満たない議論の後に無罪を決定した。

この裁判は 2000 ページにも及ぶ速記記録が残っており、マッケンナが再現した裁判での迫真のやり取りは十分な資料の裏付けあつてのもので

ある。資料にもとづく小説、という特異なジャンルを切り開いた本書は、学術的というよりも読み物としての面白さに価値があると言えよう。最後に、ワイルドとの関わりを期待する向きに興味深いエピソードを一つ。

『ウィンダミア夫人の扇』に登場する **Cecil Graham** という名前は、ステラが逮捕された時に使った偽名である。さらに裁判で二人の事務弁護士を務め、綿密かつ周到な作戦で勝利に導いたのは、ワイルドの友人の **George Lewis** だった。ワイルドが彼らに会ったという証拠はないものの、可能性は十分にある。マッケンナが詳らかにした、彼らが女性になってゆく過程—化粧、婦人服や鬢の入手など—は、まさにワイルドの仮面の思想の実践のようだ。ワイルドの巨体の影に隠れてしまっていた異形の女装者、ステラとファニーを、その息遣いまで感じられるほどリアルに甦らせた本書は、ヴィクトリア朝の性風俗の断面を鮮やかに切り取った労作である。但し文体には好悪があることも付言しておく。

参考文献

- Kaplan, Morris B., *Sodom on the Thames: Sex, Love, and Scandal in Wilde Times*.
Cornell University Press: Ithaca & London, 2005.
- Cocks, H.G., *Nameless Offences: Homosexual Desire in the Nineteenth Century*.
I.B.Tauris: London & New York, 2003.